

オノマトペを用いた歌唱指導の意義に関する一考察

河本 洋一

札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科

A study of significance of the vocal training that uses onomatopoeic words

Yoichi Kawamoto (Department of Preschool Education and Child Care, Sapporo International Junior College)

Fujino (2008) examined the effect of the onomatopoeic words related to sports on the body movements. In this report, an onomatopoeic words project the image which is understood intuitively, and tells the various meanings inclusively. Kawamoto (2008, 2010) examined the class of music (Department of Preschool Education) for the use of an onomatopoeic words. As a result, it turns out that usage of the onomatopoeic words for vocal training includes three patterns: "Training", "Sharing of directed meaning", and "Instruction content supplementation"

キーワード：オノマトペ
内容補足

歌唱指導

内容共有

Key words: onomatopoeic word
instruction content supplementation

vocal training

sharing of directed meaning

1. 研究の目的と背景

クラシック音楽やポピュラー音楽といったジャンルの違いを問わず、歌唱指導は様々なスタイルが確立されていると言えよう。しかし、表現しようとする音楽のイメージを直感的に伝えたり、様々な指導内容を包括的に指導したりする方法は、ジャンルの違いを越えて更なる研究が期待される領域ではないだろうか。

国立情報学研究所の論文情報ナビゲータ (CiNii) 及び国立国会図書館蔵書検索サービス (NDL-OPAC) を使った検索によれば、音楽表現のイメージを直感的に伝えたり、発声と発音等の諸要素を包括的に指導したりするという着想に基づく研究は論文題名上、存在しない。

そこで、筆者は『日本語歌唱における発声と発音の統合的教授法の検証的研究 (2006 (平成 18) ~ 2008 (平成 20) 年度) 科学研究費基盤研究 (C) 18530737』に取り組み、歌唱指導における諸要素の効果的な伝え方について研究した。

この研究 (河本 2007) では、まず初めに研究領域としての確立が急がれる日本語による歌唱 (以下、〈日本語歌唱〉と表記) に焦点を当て、様々な分野の人たちが感じている日本語の母音に対する感覚の比較を行った。

日本語は母音主体の構造をもっており、その母音はあらゆる言葉の響きの基礎を成している。その母音に対する感覚は多様であり、一様に語ることは難しい。したがって、様々な音楽ジャンルの指導者や演奏家が母音の響きの重要性を認識している反面、母音の響きを統一すべきとの考え方があったり、逆に響きの違いを明確にすべき

との考え方があったりするなど、それぞれの音楽ジャンルにおいて日本語歌唱に対する独自の考え方が語られ、日本語歌唱に関する議論を成立させることを難しくしている。

このように、歌唱指導はそれぞれのジャンルや指導者の違いによって方法が大きく異なる。そこで、筆者は歌唱指導の研究の場合は、在るべき姿の〈言い切り型〉ではなく、それを考えるための切り口を示す〈観点提示型〉の論の展開が必要であると考えた。そして、観点提示型の研究として、日本語歌唱の発声と発音のあるべき姿の追求ではなく、発声と発音を様々な方向性で指導するための指導項目や方法の研究を展開した。

その研究 (河本 2007) の中で、「頭のうしろから声を回す」や「ポーンと声を飛ばして」というような、比喩的表現を伴う指導法に着目するに至った。中でも「ポーン」や「カーン」といった、いわゆるオノマトペと呼ばれる言葉を使った指導法には、目指す音楽のイメージをわかりやすく伝えたり、発声や発音を包括的に指導したりできる可能性があることがわかった。

このような、いわゆるオノマトペと呼ばれる言葉を使った指導例は、藤野良孝・井上康生 (2008) によるスポーツ指導の分野での先行研究があり、その研究成果の一部は書籍化されている。

「グッと握る」「サッと投げる」といったオノマトペと呼ばれる言葉で、スポーツにおいて使用されるものは、〈スポーツオノマトペ〉²⁾と呼ばれている。その研究成果 (藤原 2005・2008) によれば、スポーツオノマトペは学習内容を包括的に伝えたり、指導内容を覚えたりするためのツールとしての効果があるとされている。

本論では、歌唱指導の際に指導者が用いるオノマトペが音楽のイメージを直感的に伝えたり、諸要素を包括的に伝えたりするツールとして有効であるという予想の下、筆者に一番近い指導現場でのオノマトペの使用実態について調査し、歌唱指導で用いられたオノマトペを抽出する。そして、それらの使用実態を整理し、オノマトペを歌唱指導で用いる意義について述べていく。

2. 本論におけるオノマトペという用語の使い方

2-1 オノマトペという用語の定義の概観

『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典(小学館2007) p.7』によれば、〈オノマトペ〉という言葉の由来は「造語すること、名前を作ること」を意味する古代ギリシア語の *ὀνοματοποιία* (onomatopoiia) であるとされている。そして、オノマトペはこの語を意味するフランス語の *onomatopée* をカタカナ発音したものであるとされている。

オノマトペと呼ばれる言葉は多彩な響きをもち、その意味は多岐多様である。

黒川伊保子(2007)は、日本語などの言語の発音から感じ取れる感覚を〈発音体感〉と称し、日本語の五つの母音それぞれには「あ：解放する」「い：尖る」「う：内向する」「え：おもねる」「お：包み込む」という基本的な感覚が存在すると述べている。さらに、発音体感は母音だけに限らず「S：爽やか」「N：親密」というように、子音にもあるとしている。

藤野らによるスポーツオノマトペの研究(藤野2005)でも、言葉の発音から感じられる感覚によって身体の動作が効果的に導かれることが示されている。

また、オノマトペは歌唱指導において指導者の発言の一部として使われる一方で、それ自体が歌詞⁴⁾という表現素材になることもある。この点は、スポーツオノマトペには見られない特徴である。

ただし、次のような場合はオノマトペの使用の際、注意が必要である。例えば「水がゴーゴーと流れる」と言った場合、「ゴーゴー」は水が流れる音を表しているとも解釈できるし、大量の水が流れる様子を表しているとも解釈できる。つまり、オノマトペには解釈する人の主観によって、その意味が擬音とも擬態とも解釈できる場合があるということである。これはオノマトペの意味の多面性を示しており、どのような意味に於いて使うかを配慮する必要があることを示している。

このように、オノマトペと呼ばれる言葉には、指導ツールや表現素材としての可能性が期待される反面、指導するときの言葉としては、意味の多面性に留意する必要がある。そこで、本論で術語としてオノマトペという言葉を使用していくにあたっては、まず、オノマトペの今日

的定義や諸問題について、辞典及び関連する論文や専門書等の内容を、時系列に沿って概観することから研究を始める。そして、整理された内容を背景として本論におけるオノマトペという言葉の捉え方についての姿勢を示したい。

◇天沼 寧編 『擬音語・擬態語辞典』 東京堂出版 1974

国立国会図書館蔵書検索システム(NDL-OPAC)での検索⁴⁾によれば、擬音語や擬態語等を書名にもつ辞典として最も古いものは、1974(昭和49)年に刊行された天沼 寧編『擬音語・擬態語辞典』(東京堂出版 1974年)である。

本書では、〈擬音語〉を「動物のなき声、あるいは、無生物が外力を受けて、壊れたり、擦れたり、打ち当たったりした時などに出る音響を、音声で表現したもの⁵⁾」と定義している。この中には音を言葉で写し取るという意味での「写音語」という捉え方も含まれている。

また、〈擬態語〉を「われわれ人間を含む生物、無生物、自然界の事物の有様、現象、変化、動き、成長などの状態様子を描写的、象徴的に音声で表現したもの⁶⁾」と定義している。そして、生物の状態を表す意味での〈擬容語〉は擬態語に含めるとしている。

このような定義にたった上で、本書では「あらゆる擬音語・擬態語が、常にそのどちらかであるかの区別がつくとは限らないし、また、人によって、同じものを、あるいは擬音語としてとらえ、あるいは擬態語としてとらえることもある。」⁷⁾と述べている。これは、オノマトペの分類やオノマトペの境界画定の厳密化が難しいことを示している。

オノマトペの境界画定の難しさについては、別の観点からの指摘もある。野間秀樹(2001)は、共時的な平面の中で捉えるか、通時的な時間の流れの中で捉えるかによってオノマトペか否かの境界画定が異なってくることを指摘した。これは、共時的な語種論と通時的な語源論と言い換えることができる。ある言葉がオノマトペかどうかの判別は、同じ日本語話者であれば、ほぼ一致した見解をもつであろう。しかし、野間の指摘からも、どこまでがオノマトペでどこからが通常の言葉なのかを峻別することは難しいことが読み取れる。

◇浅野鶴子編・金田一春彦解説 『擬音語・擬態語辞典』 角川書店 1978

本書では、擬音語・擬態語には地方差や年齢差また、社会的な違いなどがあるため、辞典を編纂すること自体が難しかったとしている。したがって、擬音語や擬態語の定義や分類については、一般的な感覚において擬音語・擬態語的に使われているものにまで範囲を広げ、それらに便宜上、擬音語・擬態語という呼称を与えて辞書

が編纂されている。これも、擬音語・擬態語の定義については境界画定の厳密化が難しいことの示唆として読み取ることができる。

この辞書の中で、金田一（1978）は擬音語・擬態語について、五つの細目に区分し、次のように説明している。

- ・擬音語：外界の音を写した言葉（物真似などの声帯模写の音声は、言葉ではないので擬音語とは言わない）
- ・擬声語：動物などの鳴き声を写した言葉
- ・擬態語：音をたてないものを、音によって抽象的に表す言葉
- ・擬容語：無生物の状態を表すものが、擬態語であるのに対し、生物の状態を表すもの。
- ・擬情語：擬態語のうち、人間の心の状態を表す言葉

このように五つに区分はしているものの、大きな括りとしては、擬音語（擬声語を含む）、擬態語（擬容語、擬情語を含む）の二つに大別している。そして、擬音語・擬態語には、必然的とは言えないまでも、その言葉が持っている内容と音（おん）に、ある程度合理的な結びつきがあるとしている。

また、擬音語では、外界の音を表すという機能から、「ピューピュー」の「ピ」ように、外来語でなければ使われないような音（おん）も使われていると指摘している。

さらに、言葉の内容と音（おん）の結びつきにある程度の合理的な結びつきがあるため、新しい音の組み合わせ（創作された擬音語など）でも意味が理解されやすいという性質があることを指摘している。これは、黒川が唱えた発音体感と同様の考え方であり、言語学では〈音象徴〉あるいは〈語音象徴〉と呼ばれている考え方である。これらと類似する考え方としては、古くは『クラテュロス—名前前の正しさについて』⁹⁾の中で、ソクラテスが言ったとされる「名前が当の事物に似たものであるためには、必然的に、人がそれから最初の名前を構成しようとするところの字母が、本性的に事物に似ていなければならない」という記述や、江戸時代後期の言霊学派が唱えた「音義説」¹⁰⁾等がある。

◇白石大二編『擬声語擬態語慣用語辞典』東京堂出版 1982

本書では、擬音・擬声、擬態（擬容）、擬情を併せて擬声語と呼んでいる。これらは、音や声、状態、心情を自然に直接的に表す。そして、その表現が一回限りのものなのか、言語習慣として固定されたものなのかといった慣用の問題を指摘している。これは後述する『現代擬音語擬態語用法辞典』でも普遍的に通用するかどうかといった問題として取り上げられている。

◇日向茂男監修・尚学図書言語研究所編『擬音語・擬態語の読本』小学館 1991

本書では、「笑う」という言葉を例に挙げ、どのように

笑ったかを表情豊かに描写するとき、実際に聴こえる笑い声にできる限り近く写し取るような言葉を擬音語と定義している。また、動物や虫の鳴き声を描写したものを擬声語、様子を感じ覚的に音声化して表したものを擬態語と定義している。

本書は収録されている語数は1,200語と少ないが、取り上げた言葉に対し、擬音語、擬態語、擬音と擬態の両方を合わせもつという三通りの区分が明示されている。

◇阿刀田稔子・星野和子著『擬音語擬態語使い方辞典』創拓社出版 1993

本書では、擬音語や擬態語に関する明確な定義は述べられていないものの、擬音語・擬態語の同類語（見出し語と基本的な意味が同じで音形態が異なる語）の音形態に共通する意味要素が明解に整理されている。例えば、「3. 清音・濁音・半濁音の比較に表れるもの」では、「ひゅーん（清音）」「びゅーん（濁音）」「ぴゅーん（半濁音）」を「音・声」という観点から見た場合、それぞれその意味的要素として「澄む」「濁る」「はずむ」というように比較整理がなされている。これは、音象徴あるいは語音象徴と「音・声」「運動の状態」「成立している状態」などの関連性を整理したものであり、オノマトペの活用により具体的な示唆を与えるものである。

◇田守育啓／モーレンス・スコウラップ著『オノマトペ——形態と意味——』くろしお出版 1999年

本書では、オノマトペとは、「現実の音を真似ている語、あるいは少なくともそのように見なされる語をさす。」¹¹⁾とされている。しかし、「この術語は、声を含む音を表す語に対してだけでなく、動作の様態や肉体あるいは精神的な状態を描写する語に対しても用いられることがある。」¹²⁾とし、後者のように広義の意味でオノマトペという用語を用いているとしている。このような定義にたった上で、声や音を表す語を〈擬音オノマトペ〉、様態や状態を表す語を〈擬態オノマトペ〉と示した。このように表記することで、オノマトペが擬音語や擬態語等の総称として定義されているということが明解になる。

◇飛田良文・浅田秀子著『現代擬音語擬態語用法辞典』東京堂出版 2002

本書では、擬音語を「活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の音、声を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定グループの人々の間で抽象的、普遍的に通用する。」¹³⁾と定義している。また、擬声語は実際に音が出ているものの表現として擬音語に含めている。

また、擬態語を「活字化できる音声連続及び発音できる文字表記によって対象の様子を表現したもので、一定の形と意味をもち、一定グループの人々の間で抽象的、

普遍的に通用する。」¹⁴⁾と定義している。

さらに、一步踏み込んだ検討としては、実際に音にすることはできない漫画の背景に描かれているような文字についても言及し、このような表現は「映像による対象の音声や様子の表現」¹⁵⁾として擬音語・擬態語とは別のものとして区別している。また、詩歌や小説などの文字言語に表れた擬音・擬態表現にも言及し、普遍的に通用する前の段階の表現があることも指摘している。この表現は実際の音にできるものとできないものがあり、これについても擬音語・擬態語とは区別している。

◇山口仲美編『暮らしの辞典 擬音語・擬態語辞典』
講談社 2003

本書では、「日本語の中で育った人には感覚的に分かる言葉でも、そうでない環境に育った人には意味の類推ができない」¹⁶⁾とした上で、擬音語を「現実世界の物音や声を私たちの発音で写しとった言葉」¹⁷⁾、擬態語を「現実の世界の状態を私たちの発音でいかにもそれらしく写しとった言葉」¹⁸⁾と定義している。「写しとる」とは、換言するならば、その言葉の語感と、その音（おん）から感じられる感覚が合っている状態とも言える。

日本語がもっている語感については、黒川伊保子(2007)も同様の概念を〈発音体感〉という言葉で説明している。黒川によれば、〈発音体感〉とは、音素ごとや音素の組み合わせによって形成される語感のことを指しており、語感が実態と合っている時にその言葉は大衆に愛されるようになると述べている。中でも日本語の五つの母音に固有の感覚があるという考え方は、母音主体の言語構造をもつ日本語歌唱の指導に多くの示唆を与える考え方である。

◇小野政弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館 2007年

オノマトペという言葉初めて辞典の書名として使用したのはこの辞典であり、現在入手できる最新のオノマトペ関連辞典である。¹⁹⁾

本書では、オノマトペの定義として次の三つを挙げている。

- ①人間の発声器官以外から出た音を表した言葉
(例:「ニャーオ」「ゴーン」等)
- ②人間の発声器官から出た音声で、ひとつ一つの音に分解できない音を表した言葉
(例:「ワーン」「オギャー」等)
- ③音のないもの、または聞こえないものに対して、その状況にある音そのものが持つ感覚で表現した言葉
(例:「きらっ」「ひらひら」等)

ただし、これら三つの基準に当てはまらないものがあることも指摘されている。それが先述の「ゴーゴー」のように擬音にも擬態にも解釈できるオノマトペである。

さらに、小野(2007)は「ひかり」のように古くは「びかり」であったと考えられているような言葉は、オノマトペになるのか、それとも通常の言葉になるのかという問題も生じてくることを指摘している。この問題は、擬音語や擬態語の厳密な定義には、その言葉の語源の歴史的背景を踏まえた総合的な検討が必要な場合があることを示している。

本書では、〈オノマトペ〉という言葉を取って書名に用いている。その理由について、擬音語・擬態語をまとめた言葉が他にないこと、また、多義性や通常の言葉との区別の困難さといった用語上の無用な混乱を回避することを挙げている。

2-2 本論におけるオノマトペの捉え方

出版年の時系列に沿って擬音語・擬態語(オノマトペ)辞典等における擬音語・擬態語やオノマトペの定義について整理してきた。その結果、全ての辞典等の定義から「事象の音や動きなどの様子を言葉で表現する」という共通した認識を得ることができた。反面、擬音語や擬態語といった用語の定義を厳密化することは難しいということもわかった。

また、『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』からは、擬音語や擬態語といった用語を包括する概念及び、用語上の無用な混乱を避ける方法としてオノマトペという用語を用いることの有意性が見いだされた。

本論では、日本語歌唱の指導において用いられる「ボンと声を飛ばして」「カーンと高いところを狙って」といった形容的表現や比喩的表現の言葉に着目している。これらの言葉は、音響的特徴(声を出す時の響きのイメージ)や生理的特徴(骨格や筋肉の使い方)等を包括的に伝える言葉である。本論を進める上では、このような複数の特徴をまとめて示す言葉が必要である。

そこで本論では、擬音語と擬態語あるいは擬容語や擬情語と呼ばれている言葉を包含する概念を示す〈オノマトペ〉という用語の意味に、歌唱指導の際に音響的特徴や生理的特徴を伝えるという意味を加え〈音楽指導オノマトペ〉という用語を使用する。また、オノマトペが歌詞として表現素材となる場合があることも勘案し、これを〈音楽素材オノマトペ〉と称することにする。

【音楽指導オノマトペ】

「音楽の指導で音響的特徴や生理的特徴を伝えるために用いられるオノマトペ」

【音楽素材オノマトペ】

「歌唱表現において、歌詞として用いられるオノマトペ」

3. 研究方法

3-1 研究の基本構想

本論では、オノマトペを用いた歌唱指導の意義を述べるため、オノマトペの使用が予想される指導場面（授業や稽古）を選定し、その様子を記録し、その記録からオノマトペを抽出することにした。そして、抽出したオノマトペの用法を把握することによって、歌唱指導に用いられるオノマトペである〈音楽指導オノマトペ〉の意義について述べていく。

傾向をまとめるにあたっては、音楽科教育における指導者の発言について論じた篠原秀夫の先行研究²⁰⁾を参考に、発言内容の区分を行う。そして、区分されたオノマトペがどのような意図で使用されたかを明らかにする。

3-2 歌唱指導で使用されるオノマトペの抽出方法

日本の伝統芸能では、まずは師匠の教えを守り、やがてそれを自分のものとして確立し独立していく「守破離」という考え方がある。歌唱指導においても師の歌声を何度も聴いて真似ることにより、言葉による指示的な指導を受けずに技術を盗み取っていくような伝承的な指導法も考えられる。このような方法も歌唱指導の方法としては確立されていると考えられる。

しかし、本論が対象としている歌唱指導の場面は、学校教育や諸団体で行われる集団的な場での指導であるため、言葉を使った指導は必要不可欠である。

篠原（1989）は、斎藤勉（1986）の教授行為の分類を基に、音楽科教育における指導行為を「言語的メッセージ」と「非言語的メッセージ」に分類した。「言語的メッセージ」とは、指示、発問、説明、助言、評価表現等のことであり、これらは指導者の発言をはじめ、板書やプリントとなって文字化されることもある。本論で検討を試みるオノマトペは、日本語歌唱の指導において行われる指示や助言の一つであることから、指導行為としては「言語的メッセージ」に分類される。

「言語的メッセージ」の問題点として篠原（1989）は、音楽教育の現場では「もっと大きな声で歌いなさい」「もっと美しく歌いなさい」「曲想を生かしながら歌いましょう」「発声に気をつけて歌いなさい」等のように、漠然とした言語を連ねていくことが多いことを挙げている。

このような問題の原因として篠原（1989）は、言語による指導は非本質的であるという教科観、音楽的な力量こそが授業を左右するという授業観、そして、音楽科の授業研究が文章化して研究されてこなかったことの三つを指摘している。このような指摘からも、歌唱指導でオノマトペを使用した指導を行うこと、また、その指導内容を文章化することには意義があることが期待される。

ただし、歌唱指導で使用されるオノマトペは多岐多様であり、調査が初めから大がかりになる危険性がある。そこで本論では、歌唱指導で使用される音楽指導オノマトペを、筆者が勤務する短大の授業（科目名「幼児音楽Ⅰ」「子どもの音楽（基礎）」）とオペラの音楽稽古（筆者が副指揮を務める団体）から抽出し、その結果を受けて調査対象を徐々に広げていくことにした。その理由としては、どちらのフィールドも筆者が直接指導に携わっており、オノマトペの使用の有無が事前にある程度予想できること、また、指導の様子を映像や音声で記録することが容易であることが挙げられる。

音楽指導オノマトペの抽出は、ビデオやDAT(Digital Audio Tape)で記録した映像や音声からオノマトペを含む指導行為を拾い上げていくという方法を用いた。

3-3 抽出されたオノマトペの分析方法

本論では、篠原（1989）が提示した、「言語的メッセージ」（指示・発問・説明・助言・評価表現・板書）と「非言語的メッセージ」（指揮・伴奏・範唱・範奏等・しぐさ・目の動き・顔の表情・間のとりかた等）という分類法に従い、歌唱指導で使用される音楽指導オノマトペを整理する。

なお、本論の目的は言語的メッセージである音楽指導オノマトペの活用についての意義を述べることを目的としているので、非言語的メッセージに関しては抽出せず、言語的メッセージのみを抽出することにした。

分析の手順は次のとおりである。

- 【手順1】映像や音声記録から指導者の指導行為でオノマトペを含むものを全て抽出する。
- 【手順2】抽出された指導行為を「言語的メッセージ」（指示・発問・説明・助言・評価表現・板書）の6項目に照らし合わせて分類する。
- 【手順3】分類された指導行為から、オノマトペを抽出する。
- 【手順4】抽出されたオノマトペについて、使用した意図を確認する。
- 【手順5】手順1～4の結果を基に、歌唱指導にオノマトペを用いる意義をまとめる。

4. 歌唱指導におけるオノマトペ活用の調査と抽出

4-1 調査・抽出の概要

◇調査1：『幼児音楽Ⅰ』の授業

日時：2008年6月11日(水)13:00～14:30

場所：札幌国際大学短期大学部第1音楽室

記録方法：定点からのビデオ撮影

指導対象：幼児教育保育学科1年生38名(女子)

◇調査2：「子どもの音楽（基礎）」の授業

日時：2010年7月9日(金)、2010年7月23日(金)
いずれも9:00～10:30

場所：札幌国際大学短期大学部第2音楽室

記録方法：定点からの録音

指導対象：幼児教育保育学科1年生40名(女子)

◇調査3：オペラの歌唱指導の調査

日時：2010年7月24日(土)14:00～20:00

場所：札幌国際大学総合情報館シアター

方法：定点からの録音

指導対象：市民オペラ団体会員 10名(男2 女8)

4-2 調査結果

4-2-1 調査1からの抽出語：「ニャーオ」「カッコー」「モー」

【抽出された指導行為】

◆教員：「子どもの歌の曲集には、たくさんのおノマトペが歌詞として含まれていますね。そのおノマトペは文字としてだけでも様々なニュアンスが伝わってきますが、これを声にすることによっておノマトペはより生き生きとした表現になります。今回は特に動物の鳴き声のおノマトペを、文字としてではなく、声という音(おと)として命を吹き込んでみたいと思います。では、最初にある動物の鳴き声を板書します。「ニャーオ」「カッコー」「モー」と板書する)これをみなさんで読んでみましょう。さんはいつ。」

◇学生：「ニャーオ」「カッコー」「モー」

◆教員：「みなさん目がいいですね。視力は1.5。そのとおりです。書いてあることは。でも、今日はこのおノマトペに様々なニュアンスを付けたいんです。そのまま読んだだけでは、目の検査と同じです。では、いいですか。もし猫が高いところから落ちていく時に「ニャーオ」と鳴いたらどんな感じになるでしょうか。」(指導行為【指示】【発問】【板書】) ※以下、「カッコー」や「モー」も同様に様々な条件を与えていく。

「ニャーオ」「カッコー」「モー」といったおノマトペは、声の多様性を実感するために、動物の鳴き声のおノマトペを様々な設定の下で出してみるという「幼児音楽I」という授業で用いられた。この授業は、動物の鳴き声(非言語音)ではなく、動物の鳴き声を表したおノマトペ(言語音)を使用し、話し声のような普段の声からは想像が付かない様々な声を出してみることで、声の表現力の可能性を広げることをねらいとしている。

例えば、「ニャーオ：高いところから落ちていくときの猫の鳴き声」「カッコー：機嫌がいいときのカッコーの鳴き声」「モー：怒ったときの牛の鳴き声」のように、具体的な設定を与え、同じおノマトペをその設定に応じて変化させることで、結果として様々な発声や発音へと導い

ている。これは、おノマトペを発すること自体が様々な発声や発音のトレーニングにつながっている例である。

普段はなかなか照れくさがって声を大きく出してみたり、様々なニュアンスを付けたりすることを苦手とする学生も、このトレーニングには比較的スムーズに取り組むことができた。

この指示によって発せられる「ニャーオ」「カッコー」「モー」といったおノマトペは単調に発せられるのではなく、具体的な設定を伴って発せられる。したがって、表現する学生による個人差はあるものの、普段の会話や朗読などではできない発声や発音をすることになる。

このような発声や発音の動作は、おノマトペだと比較的簡単に伝えられるが、ひとつひとつの手順を詳細に示すとなると次のような多くの指示が必要になる。

◇「ニャーオ：高いところから落ちていくときの猫の鳴き声ニャーオ」の声の出し方を細かく示す場合

- ① 唇を軽く開き比較的高い声で「n」の発音を作る。
- ② 舌の後ろの方を軟口蓋へ向かって持ち上げ「i」の母音を作る。
- ③ 徐々に顎を開いていき「a」の母音に近づけていく
- ④ 「a」の母音から唇を円くしていき、声の高さを下げながら、徐々に咽頭も下げていく。
- ⑤ これら一連の動作はできるだけ時間をかけて行う。

これらの動作をひとつひとつ指示することはとても煩雑である。

また「機嫌がいいときのカッコー」は学生個々によって解釈の仕方が異なることが予想されたが、「機嫌がいい」という言葉から、殆どの学生が、高い音域の声あるいは裏声で長3度の音程関係をいわゆる「タツカ」のリズムで歌うという動作になった。

さらに「怒ったときのモー」は、唇を閉じた状態からゆっくりと開いていき、できる限り低い声で唸るように「モー」と声を出す場合と、唇を閉じた状態から瞬間的に開き「モー」と声を出す場合があった。これは人間が怒ったときに発する「もう」という言葉に近い。

なお、これら三つのおノマトペを発する際に、教員からの範唱は一切ない。学生は教員からのおノマトペを伴う指示によって感じたままに表現している。

このトレーニングと類似した事例としては、〈ベルティング〉(Belting)と呼ばれる声質をトレーニングする〈エステル・メソッド〉(Jo Estill 1988)が挙げられる。

〈ベルティング〉とは、話し声(speech)、泣き声(cry)、鼻声(twang)、裏声(falsetto)、オペラ(operatic “ring”)を含めた6種類の声質のうちの一つで、ニューヨークのアップライト医療センターとコネティカット州のハスキンス研究所で行われた研究での区分法である。

ベルティングの指導法の一例として石原理恵(1999)は、ドナルドダックの声のように「ニャーオ」と息を少なくした状態でより響かせる訓練及び、声道を狭くして

声を集める「ニャン」というオノマトペを使っておこなう筋肉訓練を紹介しており、この方法が本論の調査での「ニャーオ」と、指導内容や発声法の点で類似している。いずれの例もこのオノマトペを発声することが直接何らかのトレーニングに繋がっている例である。

4-2-2 調査2からの抽出語：「キラキラ」「ポーン」 【抽出された指導行為】

- ◆教員：「今日は『こどものうた 200』に収録されている歌詞の中に含まれているオノマトペを拾い上げてみたいと思います。拾い上げたオノマトペはノートに書き写してください。」
◇学生：ノートに書き写す作業（全員）
◆教員：「拾い上げたオノマトペを使って表現することができる身の回りの物や音を具体的に書いてください。」（指導内容【指示】）
◇学生：「キラキラはチャララーンと鳴る小さなチャイムみたいな楽器、ポーンはボールが遠くへ飛んでいくとき。でもこれは音がしないですね。」（学生の発言は5名のみ。それ以外はノートの記述で全員確認）

この授業で使用されている曲集『こどものうた 200』（チャイルド本社 2005）に収録されている歌の歌詞には、多くのオノマトペが含まれている。この授業は、この曲集から身の回りにある楽器や声の音色の特徴を捉えたり、事象の様子を表したりするオノマトペを探し、音と言葉のつながりを体感することをねらいとしている。そして、このような作業の体験を記録し、保育内容「表現」の設定保育のプランを立てることに繋げていく。実習先での設定保育では音・音楽を取り混ぜたプランを考える学生が少ない²¹⁾中で、言葉と音・音楽を扱うこの授業は貴重な学習機会となっている。

この事例で取り扱われるオノマトペは、声として発することを目的とはしておらず、言葉から音の様子を想像したり、音の様子から言葉に置き換えたりするということを目的に扱われている。

音を含む身の回りの事象を言葉で表現したり、言葉から様々な表現へ繋げていったりするこのような扱いは、『幼稚園教育要領』第2章の「ねらい及び内容」にある「言葉」「表現」や、『小学校学習指導要領』第1節国語の「各学年の目標及び内容」の第1学年及び第2学年にも見られ、言語や様々な表現活動の基礎的な能力に位置づけられている。

幼稚園教育には教科科目という概念はなく、「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」という互いに連関する「領域」という概念がある。オノマトペから具体的に表現する、あるいは具体的な事象をオノマトペで表現するという作業も、様々な領域を連関させる作業の一つと言える。

4-2-3 調査3からの抽出語：「スッスッス」

【抽出された指導行為】

- ◆指導者：「どンドン前に進みながら、常に1メートル先にある子音をスッスッスッと捕まえに行く感じで息を送り込んでごらん。」（発言内容【指示】【助言】）
◇歌手：「Oh, sorelle, sorelle! Io voglio rivelarvi...」

このオノマトペは、オペラの音楽稽古（演技を付けずに歌だけを稽古すること）で用いられたオノマトペである。歌唱言語は日本語ではなくイタリア語であるが、オノマトペを用いている目的が明確であるために、本論で扱うことにした。

この指導の対象となっている歌詞は、G. Puccini の三部作の一つ「Suor Angelica」の一節である。この一節を歌っていた歌手は、音符の発音タイミングと子音の発音タイミングが同時という、いわゆる「音符の上に子音を乗せる」という歌い方をしており、イタリア語としての子音の明瞭性に欠け、指導者が示したテンポよりも遅れて歌ってしまうという状況にあった。

この指導には、子音を入れることによって母音の響きが途切れることを防ぎ、子音を音符のタイミングより僅かに早めに発音することで言葉をより明瞭にし、テンポが遅れないようにするねらいがある。この指導の結果、子音の発音タイミングが早くなり、テンポの遅れが改善されることを筆者が確認した。

この指導例は、オノマトペを発すること自体が何かを直接的にトレーニングするわけではないものの、調音器官や呼吸器官の動きを比喩的に伝えており、指導者と学習者間で呼吸の仕方や言葉のさばき方のイメージの共有化が促されている例である。

篠原（1989）によれば、この事例の他にもオノマトペを使った比喩的指示の例としては、「熱いスープをフーフー言いながらさますように、最後まで息を吐ききってごらん」「朝、すずめがチュンチュン鳴くような感じでタンギングをしてみよう」「教育の窓ガラスがピリッピリッとすくらしい歌ってごらん」という例があるとされている。

これらの活用例も、オノマトペが動作や様子を示す比喩を強調したり、補足したりする意味で用いられ、イメージの共有化を促している。

5. 調査結果の考察

5-1 抽出語「ニャーオ」「カッコー」「モー」の考察

- ◇オノマトペを含む指導行為：〈指示〉〈発問〉
◇オノマトペを使用した意図：短時間で声の表現力を拡大
◇オノマトペを使用した効果：学生の主観的評価で95%（38人中36人）が表現力の拡大を認識

この事例は、オノマトペを発することによって発音器官や発声器官の使い方を包括的に伝えるという例である。この場合、オノマトペを発すること自体がトレーニングとして位置づけられており、オノマトペが〈指示〉として指導内容に含まれている。また、オノマトペのニュアンスを様々に想像させるという意図もある。

F. ソシユールによれば、オノマトペで使用される音の選択は恣意的ではなく、意味と音との間に内的な結びつきがある²²⁾とされている。「内的な結びつき」とは音と意味の結びつきに加え、音と身体的感覚の結びつきも意味する。これは、オノマトペには複数の意味や身体的感覚を言葉の響きに乗せて包括的に伝えられる可能性があり、歌唱表現やスポーツの指導といった身体的感覚を伝える指導での有効活用が期待できるという考え方に発展できる。

オノマトペのこのような可能性に着目した東海大学共同研究チームの先行研究『スポーツオノマトペの実態について(2005)』では、「グッ」と握る「サッ」と投げる等の「スポーツオノマトペ」の実態を考察し、①「伝達内容の複合性による指導内容の統合化」②「記憶の再現性の高さによる指導内容の保持力向上」③「語感によるリズムやタイミングの把握の迅速化」の三点を、オノマトペの活用によるスポーツ指導の効果として報告している。これら三点の研究成果は、オノマトペと身体的感覚の結びつきの深さを示している。

「調査1」の「幼児音楽I」においても、受講学生の約95% (38人中36人) に主観的ではあるが、①「歌唱指導の内容が短時間で行動化できた」②「指導内容の保持力(再現性)が向上した」③「歌唱表現力が拡大した」といった感想が認められた。(複数回答有)

ただし、これらの傾向には課題が残る。まず、短時間で行動化できることはプラス要素として挙げられるものの、具体的に何がどう変化するのが把握しきれないことが挙げられる。これについては、篠原(1989)も「言語的メッセージ」の問題として同様の指摘をしている。

また、「指導内容の保持力向上」は、一週間後の本人の主観的感覚による確認である。物理的特徴²³⁾の変化の分析や、期間が数ヶ月後、数年後といった長期間での検証が必要である。また、被験者の約8割は自分の歌声について、「声域」「声量」「声質」のいずれかに関する問題意識をもっており(入学時の「音楽履歴調査」結果)、音楽指導オノマトペの活用によってできた改善が実際の歌唱の様々な場面でも有効であるかどうかの検証も課題である。

さて、「調査1」では、オノマトペを発すること自体が多様な響きのおもしろさを生かした歌唱表現の一つになり得るという点にも注目できる。しかし、本論ではオノマトペを歌唱指導で使用する事の意義に限定した論を展開するため、今回はこのようなく音楽素材オノマトペ

については作品例の提示のみに止める。

オノマトペを表現素材として使った作品例としては、『ドレミファブック(世界文化社1968)』に含まれる『パラランダンス』、そして『オノマトペの歌』(NHK教育テレビで放映中番組(『ピタゴラスイッチ』より))、『二匹の猫の愉快な歌(G. Rossini)』『猫の二重唱』、『猫の二重唱(M. Ravel)』、『動物たちの対位法』(A. Banchieri)等がある。

このような作品例は数少ないが、歌唱表現におけるオノマトペの特性を生かした活用例の一つとして別の機会の研究テーマとしたい。

5-2 抽出語2「キラキラ」「ポーン」の考察

◇オノマトペを含む指導行為:〈発問〉

◇オノマトペを使用した意図:イメージの共有化

◇オノマトペを使用した効果:100%確認(ノート記述)

この事例は、オノマトペが音(おと)の様子を伝える言葉として、〈発問〉の中で用いられている。

音の様子には、音色や音の立ち上がり、協和・不協和等があり、これらの印象を伝える言葉は多数存在する。しかし、音の印象を客観的に評価するための因子は、絞り込むことができると言われている。例えば、音色は「美的因子」「金属性因子」「迫力因子」という三大因子²⁴⁾に集約される。これらの音色因子は、形容詞的尺度を利用したSD法によって導かれる。また、音の立ち上がりは音を構成する各成分がどの程度のエネルギーをもっているかを示す〈周波数スペクトル〉でその特徴が決定づけられる。また、協和・不協和は、音程の関係によって決定づけられる。

このように、ある音の音色や音の立ち上がり、協和・不協和は様々な因子や数量によって表現できる。そして、それらを感じとして言葉で表現したものが「キラキラ」や「ポーン」というオノマトペである。このようなオノマトペを使った指導が成立するためには、飛田(2002)によれば、その言葉が一定グループの人々の間で抽象的、普遍的に通用していることが前提であるとされている。

ところで、「キラキラ」や「ポーン」という言葉は、この調査ではその言葉から連想される音を探すことをねらいとしているが、音の出し方や呼吸の仕方等の比喩としても用いることが考えられる。例えば、「キラキラした音色で演奏しなさい。」とか「ポーンと遠くへ飛ばすつもりで音を出しなさい。」といった用い方である。前者は音色の比喩であり、「キラキラ」という言葉の意味が共有されれば、目指す音色はある程度決まってくるものと思われる。

一方、「ポーンと遠くへ飛ばすつもりで音を出しなさい。」は、実際にポーンと遠くへ何かを飛ばすわけではなく、演奏するときの体の使い方等を比喩的に伝えている。比喩的表現を用いるこのような指導方法は音楽指導におい

てはしばしば行われる。ねらいとしているのは、学習者に共通するイメージを効果的に喚起し、今これから指導者がしようとしている動作や表現しようとする音楽を明確に示すことである。

5-3 抽出語3「スッスッス」の考察

- ◇オノマトペを含む指導行為：〈指示〉〈助言〉
- ◇オノマトペを使用した意図：指導内容の強調と補足
- ◇オノマトペを使用した効果：100% (当該歌手に関して筆者による確認)

この事例も共通したイメージを喚起するという点では「抽出語2」と同じである。そして、指導内容は身体動作の〈指示〉として位置づけられる。また、ある動作を行おうとしていることに対する〈助言〉と捉えることもできる。

発言内容には「どンドン前に進む」「常に1メートル先に子音がある」「捕まえに行く感じで息を送り込む」というといったオノマトペ以外の言葉による比喩的表現がふんだんに盛り込まれており、指示内容の文章構成としては複雑である。そして、オノマトペはこの複雑な指示内容の文章の一部を補うように用いられている点が、「抽出語2」とは大きく異なる点である。むしろ、「抽出語3」の指示で根幹を構成しているのは、オノマトペよりも、この指示内容を構成する指示文章である。したがって、この事例で用いられているオノマトペは、指導内容の強調や補足的な位置づけと捉えた方がよいと思われる。

また、指示文章は、「抽出語2」でも用いられていた「～のように」「～のような感じで」という比喩が用いられている。このような比喩は、結果として期待されるべき行為を直接指示するのではなく、比喩あるいは結果を誘発するような行為を指示することによって、結果へと導くという例である。

このような方法は、岩下修著『AさせたいならBと言え (1989 明治図書)』の中で、教育技術の一つとして紹介されている。その中で、岩下 (1989) はそれまでの教育実践から、「知覚できるものがないときも、やはり〈物〉を示して、イメージ化を促せ。音がなければ、それに変わる〈音〉=擬音を示せばよい」²⁵⁾と述べており、「擬声語、擬態語を含むオノマトペを言葉の中に効果的に使用すれば、言葉の力を強めることができる」²⁶⁾としている。

「抽出語3」の例は、「どンドン前に進みながら、常に1メートル先にある子音を捕まえに行く感じで息を送り込んでいく。」という指示の文章に、「スッスッス」というオノマトペが加えられることで、息を送り込むという動作の子音の入れ方の俊敏性を強調している例である。

5-4 調査のまとめ～オノマトペ活用の意義

歌唱などの実技指導において、指導者の言葉の指示によって学習者に共通するイメージが形成され、そのイ

メージが学習成果に結びつくことは重要である。

今回実施した調査からは、指導者がオノマトペを含む言語的指示を与える例を確認することができた。以下に、それぞれの事例において用いられたオノマトペを用法から整理してみる。

「抽出語1」は、オノマトペを発すること自体が直接発声器官や発音器官のトレーニングに繋がっている事例である。この事例では、普段は出すことがない声を出す方法を細かな説明ではなくオノマトペを使った指示によって包括的に伝えている。

「抽出語2」は、音(おと)の様子を伝えることを目的としており、具現化が難しい事象をオノマトペによる比喩によってわかりやすく学習者に伝えている事例である。

「抽出語3」は、指示内容を示した文章にオノマトペが加えられることにより、その指示がより明確になったり強調されたりする事例である

これらの調査内容を、用法と意義の観点から整理すると、以下の三つに集約できる。

①訓練的用法 (抽出語1)

【意義】オノマトペを発すること自体が、発声や発音等の複数の要素を包括的に伝えるトレーニングになる。

②指示内容共有的用法 (抽出語2)

【意義】具現化が難しい事象をオノマトペで比喩的に表現することで、指導者と学習者がイメージを共有することができる。

③指示内容補足的用法 (抽出語3)

【意義】オノマトペによって指導内容をより強調したり、補足したりすることができる。

今回の調査から、オノマトペを歌唱指導に用いる際の用法として「訓練的用法」「指示内容共有的用法」「指示内容補足的用法」の三点を見いだすことができた。これら三つの用法は、一つのオノマトペに対して複数の用法が該当することも考えられる。例えば「スッスッス」というオノマトペは、今回の調査のように使用すれば「指示内容補足的」であるが、息を出すスピードを付ける「訓練的」な用法としても考えられる。

6. 今後の課題

今回の調査ではオノマトペの用法や意義と共に二つの問題点も明らかになった。一つは、オノマトペを用いた場合は、学習者は具体的に何がどう変化するのがわかりづらいという点である。もう一つは、オノマトペを使った指導内容の保持力の検証をしていないという点である。

まず、具体的に何がどう変化するかわかりづらいという点は、ブラックボックスの入力と出力の関係にたとえ

ることができる。入力が指導者からのオノマトペ関連の指示、出力がその結果となる。

例えば、「ニャーオ：猫が高いところから落ちていくときの鳴き声」という設定の指示が入力に相当し、その結果発せられる「ニャーオ」という声が出力となる。このときの細部にわたる指示はブラックボックスの中である。もしその指示を細かく示したとすると、一度説明を受けただけではなかなか行動に移すことが困難である。

このような場合、オノマトペを用いて指示をすると、細かな説明をしなくても、目指す結果を比較的容易に導き出すことができる。学習者としては直感的に理解できるし、指導者としても短時間で伝えられるというメリットがある。しかし、指導者はその理論的知識や生理的知識を理解しなければ、単なるハウツーのみを知っているだけとなり、様々な状況に応じて指導のバリエーションを展開することは難しいと考えられる。

一方、今回の試行調査のもう一つの問題は、オノマトペによる指導効果及び指導内容の保持力の検証をしていないという点である。

オノマトペを使用した場合と使用しなかった場合の有意差は、音響的側面、心理的側面、生理的側面から検証する必要があるため、今後、共同研究課題として検討したい。

また、その場ではすぐにできたことでも、指導者がいなくなった環境や、時間が経過した環境で、同じオノマトペを用いた時に、指導内容が保持されているかどうかの検証も不可欠である。スポーツオノマトペでは、指導内容の保持に関してもオノマトペの有効性が確かめられたとされているが、歌唱指導においても同様の傾向が認められるかどうかについても、今後明らかにしていく。

【注】

- 1) 検索日 2005年10月1日、2010年1月13日。
- 2) 藤野良孝・井上康生・吉川政夫・堀江 繁・仁科エミ・山田恒夫・匂坂芳典 (2005) 「スポーツオノマトペの実態について」東海大学スポーツ医科学雑誌 17 p.29.
- 3) オノマトペのみを歌詞とする歌には、古くは「パラランダンス」(作詞・作曲：宇野誠一郎)がある。この歌は「パラランパン」「ポンポン」などのオノマトペのみを歌詞として使用しており、声優の太田淑子による様々な歌声がレコード(『ドレミファブック7』1969 世界文化社)に収められている。最近では、NHK教育テレビ番組『ピタゴラスイッチ』で「オノマトペのうた」(作詞・アニメーション 内野真澄・植田美緒；作曲・歌 栗原正己 2007)がある。
- 4) 検索日 2010年10月31日。
- 5) 天沼 寧編『擬音語・擬態語辞典』(1974) 東京堂出版 p.7.
- 6) 同上書 p.8.
- 7) 同上書 p.8.
- 8) 水地宗明訳『プラトン全集 2 クラテュロス』(1978) 岩波書店。
- 9) 同上書 p.151.
- 10) <音義説>とは、「国語の各音、また五十音の各行の音に固有の意義を認めて語義を説き、語源解釈をしようとする説。平田篤胤などにより、主に江戸時代に捉えられた。」(デジタル版『大辞泉』(2006)小学館)とされている。この考え方は、音に意味が存在するというものである。一方、音には元来意味などはなく、あるのはイメージであるという考え方もある。これは、近年注目されている感覚の質を意味する<クオリア (qualia)>という考え方である。ただし、クオリアに関してはまだ科学的な定説はない。(Wikipedia 2011年1月3日)
- 11) 田守育啓／モーレンス・スコウラップ著『オノマトペ——形態と意味——』(1999) くろしお出版 p.10.
- 12) 同上。
- 13) 飛田良文・浅田秀子著『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002) 東京堂出版 vii.
- 14) 同上書 viii.
- 15) 同上。
- 16)～18) 山口仲美編『暮らしの辞典 擬音語・擬態語辞典』(2003) 講談社 p.2.
- 19) 2011年1月10日現在。
- 20) 篠原秀夫『音楽科教育における言語指導行為の研究(Ⅰ)～指示を中心に～』(1989) 北海道教育大学紀要(第1部C) 第40巻第1号。
- 21) 札幌国際大学短期大学部幼児教育保育学科『学外幼稚園実習記録集』では、学外幼稚園実習の設定保育で音楽的要素を含むものを実施した学生数は、2008年度は、年少児クラス：1人/17人中、年中児クラス：3人/36人中、年長児クラス：1人/28人中、2009年度は、年少児クラス：2人/18人中、年中児クラス：3人/22人中、年長児クラス：0人/29人中である。(縦割り保育の場合を除く。)
- 22) F.ソシュール／影浦 峯・田中久美子訳『ソシュール一般言語学講義～コンスタンタンのノート～』(2007) p.97.
- 23) 具体的に物理的特徴を捉える方法としては音響解析ソフト等の機能にある、音声の波形を捉えることができる「オシロスコープ」、一定時間内の音声の音圧変化を把握することができる「波形スコープ」、音声の周波数分布をグラフ化することができる「FET (Fast Fourier Transform) メーター」、音声の周波数やエネルギーの分布を帯状に可視化することができる「周波数スペクトラム」などがある。
- 24) 日本音響学会編『新版 音響用語辞典』(2004) コロナ社 p.54／岩宮眞一郎『よくわかる最新音響の基本と仕組み』(2008) 秀和システム p.82.
- 25) 岩下 修『AさせたいならBと言え～心を動かす言葉の原則』(1989) 明治図書 p.209.
- 26) 同上。

【参考文献】

- 1) 河本洋一(2007)『日本語歌唱を語る観点についての一考察——母音の感覚の検討を通して——』音楽表現学 vol.5、2007 日本音楽表現学会。
- 2) 藤野良孝・井上康生・吉川政夫・堀江 繁・仁科エミ・山田恒夫・匂坂芳典(2005)『スポーツオノマトペの実態について』東海大学スポーツ医科学雑誌 17。
- 3) 藤野良孝(2008)『スポーツオノマトペ なぜ一流選手は「声」を出すのか』小学館。
- 4) 黒川伊保子(2007)『日本語はなぜ美しいか』集英社。
- 5) 野間秀樹(2001)『オノマトペと音象徴』月刊『言語』第30巻9号 大修館書店。
- 6) 天沼 寧編『擬音語・擬態語辞典』(1974) 東京堂出版。
- 7) 浅野鶴子編・金田一春彦解説(1978)『擬音語・擬態語辞典』角川書店。
- 8) 白石大二編『擬声語擬態語慣用句辞典』(1982) 東京堂出版。
- 9) 阿刀田稔子・星野和子著『擬音語擬態語使い方辞典』(1993) 創拓社出版。
- 10) 田守育啓／モーレンス・スコウラップ著『オノマトペ——形態と意味——』(1999) くろしお出版。
- 11) 飛田良文・浅田秀子著『現代擬音語擬態語用法辞典』(2002) 東京堂出版。
- 12) 山口仲美編『暮らしの辞典 擬音語・擬態語辞典』(2003) 講談社。
- 13) 小野政弘編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』(2007) 小学館。
- 14) 篠原秀夫『音楽科教育における言語指導行為の研究(Ⅰ)～指示を中心に～』(1989) 北海道教育大学紀要(第1部C) 第40巻第1号。
- 15) 斎藤 勉『現代授業論双書 59 もの・こと・ことばを教えること』(1986) 明治図書。
- 16) Jo Estill. Belting and Classic Voice Quality: Some Physiological Differences(1988) Medical Problems of Performing Artists.
- 17) 石原理恵『ミュージカルにおける発声指導の特徴～劇団四季の場合～』(1999) 音楽教育学 第28-3号。
- 18) 岩下 修『AさせたいならBと言え～心を動かす言葉の原則』(1989) 明治図書。